

渋谷センター街周辺における小集団活動の今日の特徴-「イベサー」を事例に

Connecting Naughty Experiences to their Careers: Contemporary Features of Youth Deviant Group Activities in Shibuya Center Street.

荒井悠介
Yusuke ARAI

1. はじめに

本研究の目的は、「イベサー」という若者の下位文化集団の実態と、活動への意味付けの分析から都市の若者の下位文化集団の今日の特徴を明らかにすることである。

この集団は90年代半ばより出現し規模を拡大してきた新しいタイプの集団であるが、今迄この集団に対するフィールドワークを行った研究はない。

本研究では、この集団への参与観察を通じ都市における若者の下位文化集団の新たな特徴を明らかにした。本研究の見解は以下に集約できる。

「イベサー」の活動は「シゴト」と呼ばれる道徳的な面での能力に結びつくと思えられるものと、「アソビ」「ワル」と呼ばれる不道徳的な面での能力に結びつくと思えられるものから構成され、これらの活動を通じて二つの側面の能力を磨きそして二つの面の幅の広さである「ギャップ」を持つことが、自己実現に結びつく「キャリア」を得ることとして捉えられている。そして活動を享乐的と思えられるものや単なる「カッコ良さ」や自己肯定感にのみ結びつくものではなく、自己実現に近づくことに結びつくと思えるがゆえに、メンバー達は活動にのめり込んでいるということである。

2. 研究背景

1990年代以降の日本では社会制度やライフコースのあり方が急激な変化をみせた。特に90年代初頭のバブル崩壊以降の平成不況期という時代の中、社会に出るまでの期間成長した世代の若者達は、それ以前に成長した

キーワード：都市計画、観光・余暇
非会員 慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科修士課程在学中

UBI 大学部非常勤講師

神奈川県藤沢市湘南平7-27-19アドバンス湘南201

TEL 090-7242-2430 E-mail arai_yusukedesu@yahoo.co.jp



都内イベサー

都内ギャルサー

世代の若者達とは異なる社会観を持つようになっていると考えられる。

そのような若者を取り巻く社会の変化が、現在の若者の下位文化集団に与えた影響とそれに伴う変化を明らかにするため、本研究では「イベサー」という若者の下位文化集団を対象として調査を行った。

「イベサー」とは繁華街にたむろする、ギャル系・ギャル男系ファッション、日焼け、特有の言い回しを使い、クラブイベントを行うことから自らの文化を形成する都市の若者の下位文化集団である。

この集団は90年代半ばより現在の形として定着しはじめ規模を拡大してきた新しいタイプの集団であり2005年以降、47都道府県全てにおいてイベサーのクラブイベントは行われるようになったことが確認出来る。

このように、90年代以降に新たに規模を拡大してきた若者の下位文化集団であるが、今迄この集団に対するフィールドワークを行った研究はない。同じ若者の下位文化集団であっても、高度成長期から安定期にかけての時代とバブル崩壊以降の平成不況期では、育ってきた社会が大きく異なり、成員達の考え方、組織の形態、活動に対する意味づけも大きく異なると考えられる。

本研究では、この集団の組織、活動の実態把握とその意味付けについての分析を通じ、過去の若者の下位文化集団との違いから見られる都市における若者の下位文化集団の今日の特徴を明らかにするため、このイベサーという集団へのフィールドワークを行った。

すなわち、社会の流動性が高まり直線的なライフコースが描けない中で、都市の若者の下位文化集団において、従来捉えられてきた「対抗」「抵抗」「享乐的」と

いう枠組みでは捉えきれない、社会の流動性に対応する「キャリア」を得る活動をしていると自らの活動を意味づける新たな姿を捉えていきたいと考えるものである。

3. 先行研究

(1) 都市の若者の下位文化に関する研究

本研究で扱うイベサーを対象にした学術的な研究は見当たらない。

ただし、イベサーと同じ都市の若者の下位文化に対しては、初期シカゴ社会学派の研究、バーミンガムの現代文化研究所の研究、国内の先行研究としては、代表的なものとして佐藤^{1) 2)} 90年代以降のものとしては田中^{3) 4) 5)}等の蓄積がある。

初期シカゴ社会学派の研究、バーミンガムの現代文化研究所の研究において述べられてきた都市の若者の下位文化に対する「対抗」「反抗」という解釈の捉え直しが行われている。

一方、国内の90年代以降の先行研究においては、田中、上野の研究において、近年の下位文化を社会運動との接点等の側面から捉え直す新たな研究の動向がある。

(2) 活動の参加者の意味付け

このような変化の中で活動の参加者の活動に対する意味付けも変化してきていると考えるが、そのような側面における変化に対する言及はなされていない。

本研究では、特に、活動の参加者のライフスパンにおける意味付けに着目する。

このような意味付けに対しては、佐藤²⁾ ウィリス⁶⁾の研究等において述べられているが、直線的なライフコースが比較的描きやすい時代や、選べとれるライフコースが限定された階層の成員を中心とした研究においては、成員達が自らの活動に対して肯定的に捉えることはあったが、これを、自らの社会的な「自己実現」と結び付けて積極的に捉える傾向は今までなかった。

(3) 若者論からの視点

また、異なる側面から、本研究の対象となるような集団を分析したものとして、90年代初頭のチーマーやコギャルについて分析した宮台⁷⁾の研究がある。この研究においては、当事者達が「学校的」な日常からの逃避というような形で描かれている。

また近年の研究においては三浦⁸⁾のガングロギャルに対する研究などの中でこのような若者達を「階層上昇志向」の低い消極的な若者達として捉えられてきた。

(4) 本研究の目指すところ

本研究ではそのように捉えられてきた若者達が、活

動を自らの社会的な自己実現と結びつくものとして積極的に捉え、「学校」的な空間を自ら作り出し、その空間を自らの価値観における社会的自己実現に結び付く「キャリア」を積む空間と捉え、積極的に活動を行っており、彼らの価値観においては「階層上昇志向」が高い若者であることを明らかにした。この知見はこのような集団に所属する若者に象徴される「階層上昇志向」の低いとされる現代の都市の若者の下位文化集団に対して修正を迫るものである。

4. 研究方法の提示

(1) 研究手法

当事者としての3年間の参加と3年半の参与観察、インタビューにより得られたデータ、イベサーに所属するメンバー自身が作成したイベントパンフレット、ホームページ、日記等を一次資料として扱い、イベサー関係の記事や報道された資料を二次資料として用い、これらにより得られたデータの分析結果を民族誌の形でまとめあげた。

(2) 研究対象

本研究の対象は、1999年より2007年迄の間に東京都のイベサーに所属してきた、所属時16才から23才迄のメンバーとする。

本研究において参与観察した集団は、渋谷センター街KAWANO前を拠点として活動する18才から22才迄の30人前後の男子のみで構成される「イベサー」「A」と16才から18才の10人前後の女子のみで構成される「イベサー」の中でも女子のみで活動する「ギャルサー」「B」という集団を中心に行った。

(3) 研究の限界

著者は、最初の三年間は当事者として参加し、後半の三年半に関しては、ギャル、ギャル男文化を研究して「卒業論文」「修士論文」を書こうとしているOBとして参加した。後半三年間については本研究で扱う対象者に対しては著者が調査者であることを伝えてあり、最後の1年半に関してはケツモチというゲートキーパーからの承諾を得ている。また、研究に際して、個人や、サークル全体の活動に影響を与えてバイアスを発生させてしまうことを極力避けるため、私は意見を述べることを控えるよう努めた。

データとしては当事者として参加した際のデータも用いるが、回顧的バイアスがかからないようにするため、他のメンバーや、当時の資料を元に、妥当性を留保するように努めた。また、資料として使う際には本人の承諾を得ている。

(4) 対象者の属性による限界

本研究の対象者達は東京都、渋谷、新宿を中心に活動拠点を置くメンバー達である。本研究の対象者達の大半が、高校生、大学生という立場であり他の都道府県の「イベサー」に所属するメンバー達と比べ、フリーターや仕事をしているメンバーの割合が低く、また中高一貫校出身者など、他の地域に比べ出身階層が高いメンバー達が中心となっているという点で偏りがあると考えられる。

また、著者が元当事者であるという事から、あえて本音を隠すと見受けられる状態があった。そのような状況で得られたデータに関しては、適宜、他のメンバーとの話や、繰り返しインタビューの中で、妥当性の留保を行うように努めた。

5. イベサーの概要

(1) イベサーとは

イベサーは 2007 年度現在、全国 47 都道府県に存在しているが、本稿ではこれ以降、東京都におけるイベサーについて述べていく。

イベサー所属するメンバー達は、自らのことを「イベサー人」と呼称する。イベサー人から構成されるコミュニティは当事者達に「イベサー界」と呼称されている。東京都のイベサー界は、「大サー」と呼ばれる大学生中心のイベサー「高サー」と呼ばれる高校生中心のイベサーの二つに分かれる。また、「イベサー」の中でも女子のみで構成されるイベサーを「ギャルサー」と呼称する。

イベント系サークルとの違いは、主に、彼等が行うイベントに来る「客」の層の違いにより分けられる。「イベサー」と一般のイベント系サークルの違いは、所属するメンバーや対象とするパーティの対象者の違いである。

イベサーのメンバー達はイベント系サークルの人間達は「フツウ」の人間を対象としているとし、ファッション、や立ち居振る舞い等に不道徳的な面が少ない人間を、自分達の主催するクラブイベントに呼ぶサークルはイベサーとは異なるものとして認識している。

(2) 系列とケツモチ

イベサーには、系列と呼ばれるグループが存在する。これは「ケツモチ」を同じにするサークルのグループである。「ケツモチ」とは暴力団関係者や他の犯罪に親近性を持つ者、他のイベサーとの間にトラブルが発生した際に相談や問題の解決にあたる人間である。また、その他に、合同イベントの実際の主催、イベサーがクラブイ

ベントを行う際に、クラブを借り、イベサーにとって有利な条件でハコを借りられるように交渉する役目を持つ。

(3) センター街におけるイベサーの位置

渋谷センター街入り口から、センター街のマクドナルドまでの約300メートルの区間がイベサー人達がたまるポジションとなっているがその中でいくつかの系列やサークルはその区間の一部に縄張りを持っている。縄張りでは独占してその部分ではたまることと勧誘することがケツモチから許可されている。この縄張りは厳密なものではないが、慣習的に定まっておき、他のサークルや系列も認識している。

(4) クラブイベント

イベサーには、「タンドク」、「ゴウドウ」とよばれる、一つのイベサーでのみで行うクラブイベントと、複数のイベサーとの合同で行われるクラブイベントがある。

単独イベントにおいてはいかにサークル人を含むイベサー人の価値観で高く評価される「イケテル」人間を多く集客できるかということ。合同イベントにおいては、いかに多くの納金をし、パンフレットで大きく取り上げられるかということが「イベサー」の中では高い価値をもつものとしてみなされており「イベサー」の力を示す重要な指標となっている。

6. イベサーの「シゴト」

イベサーの日常の活動は、自分のイベサー内部や他のイベサー、主催するイベントに来る客との交遊を深めること、新たなメンバーやクラブイベントの客の勧誘、OBや関係者の主催する集まりへの出席、他イベサーのクラブイベント運営の手伝い、ミーティングといった様々な活動から成り立っている。イベサーに所属するメンバー達は、外部から見ると一見遊びのように捉えられる行動を、自らの所属するイベサーへの貢献に結びつけた「シゴト」として意味付ける。

また、このような「シゴト」を行うことを、コミュニケーションスキルを磨き、組織のために真摯に貢献する行動として捉、このような活動を通して道徳的な側面の能力に結び付くキャリアを磨いていると捉える。

7. イベサーの価値観

(1) 「アソビ」

イベサーにおける「アソビ」とは、単なる勉強に対比する概念ではなく、それに加えて一般社会において不道徳とみなされる要素を含んだ「アソビ」である。

「アソビ」は、異性との性体験の多さ。不道徳な形で

あるとみなされる奇抜さを持ったファッション。クラブ音楽やパラパラの振りつけ等を知っているといたアソビ人としての知識の過多。により構成される。これらの要素を持つことが人物の評価において重要な意味を持つ。

(2) 「ワル」

イベサー人達の「ワル」について述べていく。「ワル」と悪の微妙な違いを重視する傾向は広く見られる。前者の「ワル」は悪そうであること、許容された範囲内での悪事や、逮捕等の危険性は避けた将来の社会的な経歴を傷つけない範囲での悪事であり基本的には非社会的な悪事である。そのため、明確な反社会的な悪とは異り、基本的に前者をイベサー人達は追求している。喧嘩の上手さ、道徳的に問題があるとされる仕事や違法ではないが法律に触れる距離が近い仕事、悪のイメージを含んだ不道徳な形であるとみなされるファッション。不道徳な面で有名とされる人物の名前やエピソード、脱法ドラッグの効用や法律の抜け道等ワルな人間としての知識の過多により構成される。

(3) 「ギャップ」

「アソビ」「ワル」の面を持った上で、道徳的な面で高い能力を発揮する行動をする人間への高い評価。例えば、「アソビ」は勉強と対比される要素をもつものだが、「アソビ」の要素を多く持ちながらも、勉強ができる人間は非常に高く評価される。また、「ワル」は悪、つまり反社会的な色合いを強くもつ価値観であるが、法的な処罰を受ける人間は否定的にみなされる。このような集団において評価される「ギャップ」として評価される要素としては、内面と外見の幅の広さに対する高い評価。現在の人格における状況により相反する側面をみせる、社会的な面と社会的でない面の幅の広さ、現在と未来の幅の広さ等が挙げられる。が根本にあるのは、道徳的な面と不道徳的な面の幅の広さである。

8. イベサーの社会観

(1) イベサー人の理想像

道徳的な面のみでしかキャリアをつむ事ができない「フツウ」の人間達よりも、道徳的な面でのキャリアと不道徳的な面でのキャリアをつみ、これらの二つの要素の幅の広さである「ギャップ」を持った人間が、社会的に自己実現をはたすという像をイベサー人は持つ。

(2) イベサー人のキャリア志向

イベサー人の活動は「シゴト」とよばれる道徳的な面での能力に結び付くと捉えられているものと、「アソビ」「ワル」と結びつくと呼ばれる不道徳的な面での能

力に結び付くと捉えられているものから構成され、これらの活動を通じて二つの側面の能力を磨き「ギャップ」を持つことは、社会的な自己実現に結び付く「キャリア」をえることとして捉えられている。

9. 結論

ユースストリートカルチャー集団に対する先行研究においては、成員達が自らの活動に対して肯定的に捉えることはあったが、これを、自らの「自己実現」と結び付けて積極的に捉える傾向は今までなかった。

また世代論における先行研究においても本研究の対象となるような若者たちは、「学校的」な空間から逃避をしている「階層上昇志向」の低い消極的な若者達として捉えられてきた。

だが、本研究ではそのように捉えられてきた若者達が、「学校的」な空間を自ら作り出し、その空間を自らの社会的な自己実現に結び付く「キャリア」を積む空間と捉え、積極的に活動を行っており、彼らの価値観においては「階層上昇志向」が高い側面があることを明らかにした。

この知見はこのような集団に所属する若者に象徴される「階層上昇志向」の低いとされる都市の若者の下位文化集団における若者像に修正を迫るものである。

そして、このような価値観が受け入れられていることは、90年代以降の社会制度やライフコースのあり方の急激な変化の中、都市の若者の下位文化集団に新たに現れてきた特徴であるといえる。

参考文献

- 1) 佐藤郁哉：『暴走族のエスノグラフィー』，新曜社，1984 .
- 2) 佐藤郁哉：『ヤンキー・暴走族・社会人』，新曜社，1985
- 3) 田中研之輔：「「若者広場」設置活動にみる都市下位文化の新たな動向——「土浦駅西口広場」設置を求める若年層の諸実践から」、『現代スポーツ評論』p. 158 ~ 169, 2002.
- 4) 田中研之輔：「都市広場の身体文化——スケートボーダーの生活誌から」、『現代スポーツ評論』11 p. 46 ~ 61, 2003.
- 5) 田中研之輔：「都市空間と若者の「族」文化——スケートボーダーの日常的実践から」、『年報社会学論集』17 p. 120 ~ 131, 2004.
- 6) Paul E. Willis：『ハマータウンの野郎ども』，熊沢誠山田潤訳，ちくま学芸文庫，1996.
- 7) 宮台真司：『まぼろしの郊外』，朝日文庫，2000.
- 8) 三浦展：『マイ・ホームレス・チャイルド』，クラブハウス，2001.

